



編集・発行 山見妙勢能 山見妙勢能
日蓮宗 広報部
〒563-0132
大阪府豊能郡野間中
電話 072-739-0329
FAX 072-739-2883

甘藍 (カンラン)

新實信導

「カンラン持っていくか」
祖母が今から畑に行って野菜を取ってくるからもう少し待つてほしいと母に伝えた。しばらくすると、祖母は大きなキャベツを抱えて畑から帰ってきた。

この時私は子供ながらにカンラン＝キャベツであることが理解できた。

キャベツの名前の由来は英語のキャベツジ (cabbage) から来ているそうで、キャベツとは、頭を意味するラテン語のカプト (caput) が語源であるという。また、別名に中国語名の甘藍 (カンラン) があり、昔はこの呼び名が一般的であったと

いう。

ところで、法華経の名称は妙法蓮華経を略したもので、インドのサンスクリット語のサツダルマプンダリーカストラ (saddharma-pundarikasutra) 「正しい教えである白い蓮の花の経典」という意で、これを漢字に音写したのが薩達磨芬陀梨伽蘇多覽である。

天台大師智顛 (ちぎ) の作と伝えられる「頂経偈」には次のような文がある。

稽首妙法蓮華経 薩達磨分陀利伽 一秩八軸四七品 六万九千三八四 一文文是真仏 真仏説法利衆生 衆生皆已成仏道 故我頂礼法華経 稽首とは、頭を地につける礼で妙法蓮華経に礼拝す

る意。薩は妙、達磨は法、芬陀梨伽は蓮華、蘇多覽は経を意味する。一秩とは、書物の傷みを防ぐため、包む入れ物。八軸とは法華経の全八巻。四七品とは法華経の品数で全二十八品。六万九千三八四は法華経の文字数。一々文々是真仏とは法華経の一一の文字が御仏そのものであり、仏様は法をお説きなられ、利益を与えてくださる。つまり、私

たち衆生は経巻を拝読し、頂戴しているところに、もうすでに仏道を成就していることになる。この経巻を御仏と思い、両手で押し頂くところに信仰がある。今では甘藍という言葉は使わなくなったが、キャベツは日本の食卓を代表とする野菜となった。法華経が日本を代表とする経典となり、やがて世界中に弘まっ

《法華経に学ぶ現代》

佛

眉間白毫の

光を放って

東方萬八千の世界を

照したもうに

周徧せざることをなし

『序品第一』

東の峰に 昇る陽は 世界を照らす 希望の光
心の闇を 切り開き 英気をみんなに 届けます
未来の扉を 叩きましょう
運は自分で 開くもの
そこに気づけば 仏さま エールの光を 放つてしょう

【1月の行事予定】

☆正月歳始祈禱 1日～15日

※歳始祈禱申込受付中

※開運シールの授与

★書初め写経会 13日(日)11時

北辰閣2階にて金紙に写経

初心者の方もどうぞ！

★月例祈願法要 15日(火)13時

願い事を書いた兎矢を献納

★鷗様月例祭 22日(火)15時

*お火焚祭りは2月11日です

*2月まで茶論はお休み

《送迎車の案内》

能勢電鉄ケーブル・リフトは、

12月3日～3月15日運休(但し

大晦日～1月3日は運転)

御祈禱・御回向等を受けられる

方は能勢電鉄「妙見口」駅～妙

見山上の間を能勢妙見山から送

迎車を出します。事前予約が必

要ですので妙見山事務所まで(

連絡下さい。

電話072(739)0329

賀状前にて

中沢勇輝

年末に近づくにつれ、とにかく忙しい。スマートフォンやタブレットでスケジュール管理をしているのだが、毎日のように何かしら予定が入っている。

前回、丸一日休んでいたのはいつだったかと思返すとどうやら半年も前のことだった。歳を重ねると、こんなには動けないなと思うが、何とかなっている自分に少し驚く。

余談だが師走の語源は、お坊さんが年末に檀信徒の家に伺い、お勤めをする「窯締め」から来ているらしい。窯締めで、お盆の棚経のように、あちこちの家に伺い、走り回っていることから来たそう。

関西では見かけない風習だが関東ではよく見かけると聞く。関東のお寺さんも

大変だなと思いつつ、この忙しさに窯締めまであるとどうにもならないなと思ってしまう。

あまりにも忙しいのでこの時期、そろそろ書いているはずの年賀状も一切手についていない。

真つ白な年賀はがきの束が私の机の上で早く書けてもどうかのように存在を示しているが、いつも見て見ぬふりをしている。そんな、ものぐさな私と比べると（比べること自体、失礼な気もするが）日蓮大聖人はなんとも筆マメであったようである。

現存する真蹟（大聖人が書いたものであると確実に認められる筆跡）だけでもおおよその数字を『昭和定本日蓮聖人遺文』に拠って挙げれば、著作・書状のうち完全に伝存するもの一三三点、断片の存在するもの八七点、図録の完全なもの二一点、断片のあるもの二

先月号のこの欄に掲載されたとおり、副住職は十一月一日より千葉中山の大本山法華経寺に開設されている日蓮宗加行所で、壹百日間修行中である。四度目の修行の眼目は「水神相承」と呼ばれる相伝を伝授されることにある。万物を組成するとされる五行（木火

☆☆☆☆星のたより☆☆☆☆

土金水の二つである水は、中でも最も重要な要素で、これを司るのが水神様だ。生物の根源であり、自然界の循環を司るのが水神様。その水神様の法を伝授されるのが第四行の眼目だ。二月十日成満の後、同行の行僧上人とともに帰山する日が待たれる。

K.J

俳壇

（みのり）

白雲の去り又来る冬うらら
山かけの家二三軒ゆず実る
数へ日や仏具を磨く縁広し
一仕事終へて囲むや牡丹鍋
暮早しどこかで響く寺の鐘

法華経茶話

長者窮子喩（一）

続いて長者窮子の喩えについてみていきます。長者窮子の喩えは信解品第四に説かれる喩えです。

ある父親のもとから突如息子が失踪します。父親は息子を探す旅に出て、その旅先で商売に成功し長者となります。そしてある日、偶然にも父親の豪邸の前を乞食となつた息子が通りかき、父親は慌てて連れ戻そうとしますが、息子は恐怖のあまり逃げ出してしまいます。そこで父親は従者に、豪邸で一緒に汚物処理をしよう、と言って息子を誘い出すように命じました。そして息子は父親の邸宅で汚物処理をするようになり、やがては長者の財産管理をするまでになりました。しかし父親は死期が近づいていることを知ると、従者を枕元へ集め、この乞食が自分の息子であり、全財産を息子に譲ることを明かしました。